
君の笑顔がみたいから

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の笑顔がみたいから

【Nコード】

N9571B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

哀菜は言葉を話せない。そんな彼女に出会った水樹は、彼女と仲良くなるためにたくさん話かけるが、水樹の親友・秋はそれを止めようとする。「ただ一緒にいて笑顔が見たいんだ」そう言った水樹に対して哀菜は……。感動のラブ・ストーリー。

俺らは世界中の何億分の1の確立で出会った。

たぶん、きっと

君が君だったから俺は君に恋をしたんだと思う。

「わっ、ごめん」

友達の秋と渡り廊下を歩いていると、不意にぶつかってしまった。

どんつと音をたて、その女の子は持っていた筆箱を落とす。

俺が謝っているのを聞いているのか分からないが、黙って筆箱を拾い上げる。

そしてじつと俺の方を見た。

「・・・?」

俺が不思議そうな顔を見ると、女の子は走って行ってしまった。けれど足元を見ると生徒手帳が落ちている。拾ってみると、顔写真はさっきの女の子だ。

「水樹、それあの子の?」

「みたい。届けた方がいいよなあ」

手帳を眺めながら秋に問う。

けれど秋はあまり乗り気ではないようだった。

「お前あの子のこと知らないだろ」

「え？」

「あの子・・・川中島哀菜って喋れないんだよ」

秋の突然の言葉に、は？と聞き返す。

なんでか知らないけどある日突然声が出せなくなっちゃったらしい、と秋は言った。

誰に聞いたのかを尋ねると、川中島哀菜と仲が良かった女子が昔秋にそう言っただけらしい。

仲良かった子とも高校が離れ、人と話せない彼女は未だに溶け込めない秋は言う。

高2にあがった今、友達も増えて楽しい時期なのに彼女はそうではないんだ。

人と話せないって、どんな気持ちなんだろう。

自分の思いが伝わらないってどんなに苦労するんだろう。

そう思えば思うほど気になって仕方がない。

「お前とは住む世界が違う子だよ。関わらないほうがいいんじゃないか？」

秋の言葉を聞き流して俺は言った。

「よし、俺放課後彼女とこ行く」

秋はあまり関わるなと付け足したが、俺はそんな忠告を受け流した。なんとなく彼女に近づきたいって思うんだ。好奇心……って言ったら正しいのかもしれないが、ただ彼女には今の世界がどんな風に見えているのかを知りたくて。

だって俺は声が出せるし、友達もいる。なんの不自由もなく育ってきているから彼女の大変さは分からない。だから余計に気になってしまうんだ。関わるなって言われたら関わりたくなっちゃうようなこの気持ち、言葉じゃ表しきれない。

予鈴の鐘の音が聞こえて、急いで秋と教室へ戻る。ぎりぎりのところで間に合い、すぐに教科書を出す。今日の授業はあと今から始まる6限とHRだけだ。

ノートに黒板の字を写しながら、窓の外をぼーっと見ていると、向かいの校舎の音楽室で授業をやっているのが見えた。

「あ、次郎んちのクラスか」

ってことは7組なわけだ。

……そつえばあの子は何組なんだろう。さつき拾った生徒手帳をちらっと見ると、そこには2年7組14番と書かれている。7組だったんだ。

・・・今音楽の授業だよなあ。

あの子喋れないんだろ、じゃあ音楽の授業ってどうするんだろ。
まさか見学・・・とか？

だって喋れないんだったら当然歌なんか歌えないだろ。

俺は必死に目を細めて向かいの校舎を見る。

どこにいるんだろう、なにをしているんだろうとしきりに彼女を探
す。

みんな並んで歌を歌っている。

女だからソプラノかアルトなんだろうけど・・・
でも並んでる中に入ってるのか？

見渡しても、彼女の姿は見えない。

やっぱり音楽は無理か。

そう思っただけ息をもらし、再びノートに書き写そうとした、その
瞬間だった。

「いた・・・」

目をパチクリ開け、再び窓にかじりつく。

そこには、並んで歌を歌っているみんなの前でピアノを弾いている
彼女の姿。

「ピアノ・・・弾けるんだ」

音こそは聞こえないが、指を左右に素早くなめらかに動かしながら
演奏しているのが見える。

確かに声が出なくても伴奏は出来る。

見入っていると、隣の席の女の子が俺の肩をつつつく。

「水樹くん、当てられてるよっ」

「えっ」

クラス中の視線が俺に集まっている。

バツと前に向きなおし、その女の子はどこ?!と尋ねる。

質問の内容を聞き、俺は立ち上がって答える。

「えー・・・っと、あー $x \parallel 6$ のとき最大値22?」

「正解だ」

なんとか答えを言い、ガタンと椅子に座る。

そして数学教師は言い加えた。

「お前が数学得意なのは知ってるがちゃんと授業は聞くんぞぞ」
「ういーっす」

けれど、やっぱり音楽室の方を見てしまっただ。

指揮者の人になにか言われ、彼女はうなずいている。

そしてまたピアノを弾き始める。

言葉がない・・・って、彼女にとってどんなものなんだろう。
もう何年も話してないし、慣れてるのかな。

でもやっぱり寂しいものなのかな、言葉が話せないのは。

俺だったら1時間でアウトだしね。

そんなこんなで6限が終わり、長い長い担任のHRが始まる。
うちの担任ってやたらに話が長いんだ。
他のクラスの倍以上は話す。

あ、あの子帰っちゃうかな。
そうだとしたら渡すの明日になっちゃう。

はなく終わんねーかな。

いそいそと待っていると、ようやく担任の話が終わる。
号令が言い終わると俺はすぐに教室を出た。
走って7組まで行き、ドアをおもいきり開ける。

「あのっ、川中島哀菜さんいますかっ!!」

ざわっと7組がざわめいた。
一番に出てきたのは、次郎だった。

「お前あの子になんの用なんだよ？」

次郎はひそひそ声で言った。

俺は彼女の忘れ物を届けにきたんだ、と言うと彼女の姿が見えた。

彼女のもとへ行き、手帳を渡そうとすると彼女は小走りで教室を出て行ってしまった。

「えっ?!」

俺はなにがなんだか分からず、髪の毛をくしゃつと握った。

「生徒手帳？」

「ああ。なかったら困ると思って。でもなんで逃げたんだろ」

「そりゃ逃げるだろ」

「え？」

次郎に聞きかえそうとしたが、なんとなく彼女がどこにいるか思いついたから俺も急いで7組を出た。

「あつおい、水樹！」

だって彼女はきつと部活になんか入ってないだろうし、荷物を置いて学校から出たりはしないだろう。だからきつと、たぶんあそこだ。

渡り廊下を走り、階段を駆け上る。

はあはあと息を切らし始めた頃にようやくたどり着いた。

ドアを目の前にして、ポロンと音を奏でる彼女を目にして俺は思った。

—— お前とは住む世界が違う子だよ ——

確かに秋の言うとおりかもしれない。

喋る相手がいなくて、ピアノを弾くしかない彼女と俺とでは全然違

うんだ。

俺はピアノなんて全く弾けないし、歌だってそんなに上手くない。でも音楽の授業は普通に受けられるし、他の授業でも発表できる。友達とバカやって楽しく話して笑ってられる。

こんな誰もいないような放課後の音楽室で一人、なんの曲を弾くわけでもなく鍵盤を一つずつ鳴らしているような子とは、全然違うんだ……

けど、それでも彼女に関わりたいてって思うのはおかしいか？

話し相手がいないなら、一人でいるしかないのなら、俺が隣ですつというんな話をしてやる。

そう思うことは決して同情なんかじゃない。

ただ俺が彼女という存在をもっと知りたい。それだけなんだ。

「見つけた」

ドアを開けると彼女はこっちを見た。

鍵盤を鳴らすのをやめ、俺をじっと見た。

「さつきはごめん。逃げたくもなるよな」

普通に考えれば分かることだった。

誰とも話さない彼女がましてや男子に呼び出しされるなんて、周り

がどう思つか考えもしなかった。

話題にされ注目され、それはきつと彼女を悲しませることになるなんて思ってもいなかった。

次郎が言いたかったのはきつとこのことだろう。

俺は手帳を差し出した。

「6限の前に俺とぶつかったの覚えてる？そんなときにこれ落としてったよ」

彼女は、あっ！と驚いたような顔をした。

そして手帳を受け取ってポケットにしまった。

深々とお辞儀をしながら。

「ねえ、さっき音楽だったでしょ？俺の教室から見えたんだ。ピアノ弾いてたね」

話しかけるとちよつとびくりしたような顔をしたが、俺が「すごいよね」と言うと、少し顔を赤めらせて微笑んだ。

「喋れないんだって？」

俺が尋ねると彼女は少し寂しそうにうなずいた。

俺は鍵盤をポロン、ポロンと人差し指で押しながら言った。

「じゃあさ、俺といっぱい話そうよ」

彼女は俺の顔を見上げた。

不思議そうに見つめてくるもんだから、もう一回言ってみせた。

「と・も・だ・ち。ねっ？」

けれど彼女は少し戸惑っているようだった。

なにを戸惑っているのか分からない俺に、彼女は自分の喉を指差し、手を軽く振った。

ああ・・・声が出ないから無理、とでも言いたいんだ。

「そんなん気にすることないって。俺が勝手に話すから（笑）」

俺の、気にすることないという言葉が嬉しかったのか、彼女は笑ってみせた。

一瞬ドキッとしてしまった。

そうして、俺たちは友達になったんだ。

「へえ、すごいな。じゃあ何歳からピアノ習ってるの？」

いつものように放課後、音楽室。

彼女は俺の問に答えるため、手を使って数字の9を表した。
つまり7歳からやっているという意味だ。

「小学校からかあ。道理で上手いわけだ。じゃあいつものアレ弾いてほしいな」

ニカツと笑いながらそう言えば、彼女は嬉しそうに笑ってうなずくんだ。

そうして鍵盤に指を置き、華麗なリズムでピアノを弾き始める。

名前は知らない曲だけど、でもとっても綺麗なんだ。

聞いていて全然飽きないし、むしろ楽しめるような音楽。

放課後に彼女とこうして話をして、ピアノを弾いてもらうのが日課になってからもう2週間は経っている。

時計の針が5時を指すと、俺たちは一緒に帰る。

彼女はバス通学だから乗り遅れるわけにはいかないから。

バス停があるところまで一緒に行き、バスが来るまでのほんの数分を一緒にベンチに座って待つ。

バスが来たら彼女はバスに乗り、俺は歩いて家へ帰る。

「じゃーな、川中島。また明日っ」

そう言っつ俺は手を振る。

彼女もかすかに手を振ってくれるのが、嬉しくて。

最近、あたしに話しかけてきてくれる男の子がいる。

あたしはなにも答えられないのに、彼は嫌そうな顔一つせずに楽しい話や面白い話をたくさんしてくれるの。

あたしのピアノを聞いて喜んでくれて、バスが来るまでの少しの間一緒に帰って、そんな友達らしい振る舞いをされたのはとても久しぶり。

・・・あたしにだって小学校のときは友達がいた。

突然声が出なくなってしまったあたしだけど、以前と変わらぬ態度で接してくれた女の子。

まるで水樹くんのように。

でもその子と中学で離れてからはもう誰とも接することがなくなってしまった。

あたしに近寄る子もいなければ、自分から近づくこともない。
話の出来ないあたしが自ら友達を作ろうとしても無駄ってことは十分に分かっているから。

でも水樹くんは話しかけてくれた。

こんなあたしに、友達になろうって言ってくれた。
本当に嬉しくて、つい笑顔になってしまう。

水樹くんが笑ってくれるとあたしも幸せになる。

他のクラスにも友達がいるような、明るく良い人な水樹くんとあたしでは全然世界が違う。

でも水樹くんはあたしに話しかけてくれるから、そんなことはつい忘れてしまうんだ。

移動教室のあと、水樹くんの教室の前を通りかかった。
ドア側に水樹くんの姿が見えて、ついチラッと見ると、水樹くんと水樹くんの友達の会話が聞こえてきた。

「水樹放課後にやってんの？最近はやくいなくなるけどさ」

「あーほら、新しく出来た友達とたわむれてるの」

「新しく出来た友達？」

「こないだ廊下でぶつかった川中島」

あたしのことについての会話をしていると分かり、つい歩く速度をゆるめる。

すると、水樹くんの友達が驚き声を上げた。

「はっ?!なにお前、あの子とつるんでんの?!」

「イエス」

「関わるなって言っただじゃんよー!だってあの子喋れないんだぜ?

!」

「そんなこと分かってるよ」

ドクン、ドクンと心臓の音が鳴る。

足を止めて耳を傾け、化学の教科書をぎゅっと握り締める。

「わかってないだろ。じゃああの子と関わってどうするつもりだ?」

「どうって・・・」

「好きなのかよ?」

「それは・・・」

それ以上聞きたくなくて、逃げてしまった。

走って教室に戻って、机にふせた。

分かっていたことなのに。

あの人が言っていることは正しいことなのに、どうしてこんなにも悲しい気持ちになるんだろう。

あたしと水樹くんとは世界が違う。

太陽のようにいろんな人に囲まれて暮らす水樹くんと、月のようにひっそりと日々を過ごすあたしとは合うわけがなかった。

周りだってあたしたちが一緒にいるのを見れば変だって思うことも、ちゃんと分かっていたはずなのに。

あたしといることで水樹くんが傷つくのなら一緒にいない方が良い。あたしは水樹くんと一緒にいたいって思っても、周りがそれを許さないのなら願ってしまうことはいけないんだ。

授業が終わり、つい癖でいつものように音楽室へ行く。

ドアの前で立ち止まり、入るか入らないかで迷っていると後ろから声がした。

「川中島？入んないの？」

水樹くんだ。

あたしは水樹くんの顔を見て、すぐに逃げたした。

「えっ？川中島？！」

校舎を走るが、20mも行っていないところで腕を捕まれる。ぐいっと引っ張られ、息を切らす水樹くんの声がもれる。

「なんで逃げんだよ！」

真剣な顔をする彼の顔を見ることができなかった。

だって、あたしにはなにも言えないの。

言いたくても、言えない。

言おうにも手段がない。

言えたとしても、言い表せないの。

こんなぐしゃぐしゃした気持ち、どうしたら良いのか自分でも分からない。

「川中島っ」

水樹くんはあたしの腕をぎゅっと握るけど、あたしは水樹くんを振り払った。

びつくりした水樹くんの顔を見ながら、言葉に出来ない悔しさを顔に出す。

唇をかみ締め、パツと目をそらした。

「・・・んだよ、わかんねえよ！言ってくんなきゃ分かんねえよ！」

そう言った水樹くんは、「しまった」というような顔をしながら手で口を押さえた。

そうだよ、言わなきゃ伝わらない。

けど、言いたくても言えないの。

言いたいことは山ほどある。

それでも自分一人で抱え込まなきゃいけないこの辛さ、きつとみんなには分からない。

きつと水樹くんにも分からない。

あたしはその場を逃げ出した。

水樹くんは追いかけてこなかった。

家で一人、俺はベッドの上に寝そべる。

考えることは、さっきのこと。

どうしてあんなこと言っちゃったんだろう。

伝わらなくて悔しいのは俺じゃなくて、川中島なのに。

・・・言葉がなくても気にしないって言ったのは俺だ。
なのに言葉がない今、あいつを苦しめた。

ずっとそんなことを考えていると、いつの間にか寝てしまっていて、
起きたのは翌日の朝になった。

「水樹ー、起きなさい」

「はいはい」

いつものように母さんが起こしに来て、俺はベッドから立ち上がる。
制服に着替え、朝食をすませるためにリビングへ行く。

テーブルの椅子に座って目の前の朝食を見ても、食べる気にはなれない。

ちょっと焼きすぎている食パンを手にとっても、バターをぬろうともせず、おかずに手をつけるわけでもない。

ただただご飯を見つめ、ぼーっとする。

そのうち母さんが、いらないの？と尋ね、俺はうんとうなずいた。

家を出て道を歩いていると、楽しそうに走る小学生の男女がいた。
仲よさそうで愛らしいな、そんなことを思っているとなぜか悲しく
なった。

楽しそうだって思ったのは、あの子たちが元気良く会話していたから。

たとえばもしあの男の子が俺だとして女の子が川中島だとしても、
あんなふうにはならない。

・・・それでも俺はきつと笑顔で川中島に話しかけるんだろうな。
俺が笑うと川中島も笑ってくれるんだ。

なにも言わなくても分かる、楽しんでくれてる・・・・・・・・って。

分かっているはずなのに、どうしてあいつの苦しみを分かってやれ
なかったんだろう。

どうしてあんなこと言ってしまったんだろう。

後悔でいっぱいだ。

学校へ着き、下駄箱を開ける。

すると折りたたんだ紙が入っていた。

広げて読んだ。

『水樹くん、昨日はごめんなさい。』

小さい頃にシヨックを受けたことから

あたしから声が消えました。

あたしはもうずっと何年も喋れなくて、

あたしにとってはそれが普通になってた。

でも水樹くんが話しかけてくれたから

あたしも喋れたら良いのになって思うようになりました。

伝わらないのがこんなにも辛いつて、初めて知った。
悔しくてたまらない。

だから、あたしももつと頑張ろうと思います。
いつか喋れるようになったらまた水樹ちゃんと話をしたいです』

それは、川中島からの本音の言葉。
あいつなりの必死の伝える手段。

手紙を握り締め、2年の階まで走って階段をのぼり、廊下を走る。

6組の教室の前を歩いて自分の教室へ行くこうとしている川中島が見えた。

俺は全速力で走った。

「川……哀菜っ！！」

ぎゅっと後ろから抱きしめた。

哀菜は驚いた顔をして俺を見た。

「ごめん……昨日はひどいこと言った」

哀菜はちつとも悪くない。

なのにそれでも前向きにやろうとしている。

俺は自分を責めて、マイナスに考えるだけだった。

追い詰めることで被害者ぶって責任転嫁しようとしていたのかもし

れない。

「・・・でも、確かに哀菜が話せたらって思っていたことは本当なんだ」

そうしたらもつと会話が弾むだろう。

そうしたらもつと仲良くなれるだろう。

そう思っていたことは事実。

「俺はごく普通の人間でなんの不自由もなく生きていて・・・俺はただ哀菜には世界がどんな風に映っているのかが知りたかっただけだった」

生きていて楽しいのか、とか。

なにを思っ生きているのか、とか。

声の出ない日常はどんなものなのか、とか。

好奇心って言われても本当はおかしくない。

「でも、哀菜のことを知っていくたびに・・・もっと一緒にいたいって思い始めたのも本当なんだ」

いつしか生まれた愛しさ。

隣にいてくれることが自然になっていたように思えた。

「俺は哀菜の・・・哀菜の笑った顔が見れば幸せなんだ！」

ただそばにいたい。

そう思ってはいけないのか。

言葉がなかったら一緒にはいられないのか。

俺の手はかすかに震えていて、きつと哀菜にも伝わってしまったている。

かっこ悪い。

哀菜は、哀菜を抱きしめている俺の手をぎゅっと握った。後ろから抱きしめているから、哀菜がどんな顔をしているのかは分からない。

けど、伝わる。

哀菜も俺と同じだってこと。

「・・・哀菜だけ頑張る必要はない。俺も、哀菜と一緒に生きてきたいんだ。二人で笑って楽しんで・・・時にはケンカもしながら一緒に少しずつ進んでいこう」

柄にもなく目に涙が浮かぶ。

目を深く閉じ、涙が流れないように必死に食い止める。

ふと目の前を見ると、たくさんの人がいることに気づいた。みんなが俺らを見ている。

「げっ！」

思わず哀菜から離れ、顔が赤くなった。

右手で顔を隠すように覆うと、哀菜が俺の方を振り向いた。

「……あたし……も、そうやってゆつくり水樹くんと生きていきたい」

俺は目を見開いて、哀菜を見た。

俺が愛したあの笑顔を浮かべながら、哀菜は今、言葉を発している。

「哀……言葉……」

感動のあまり、上手く言葉が出てこない。

けれど、確かに見えないところで俺たちの絆は深まった。

哀菜に何年かぶりに光がさした。

再び話したいという哀菜の願望を、天が受け入れた。

「ありがとう」

君と僕、そんな君とこんな僕だから出会ったんだ。

君が笑ってくれるために俺がいること、忘れないで。

交わしたかった言葉

今、ここで舞う。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9571b/>

君の笑顔がみたいから

2010年12月31日02時22分発行